

## 幼保連携型認定こども園における異年齢交流の空間に関する研究

### A study on the space of a different age exchanges in Chartered Infant School that is the Integrated Institution of Kindergarten and Nursery School

○渡辺紗也加<sup>1</sup>, 山中新太郎<sup>2</sup>\*Sayaka Watanabe<sup>1</sup>, Shintaro Yamanaka<sup>2</sup>

#### 第 1 章 序論

##### 1-1. 背景・目的

共働き・核家族化・待機児童・少子化などの問題による教育・保育ニーズの多様化に対応するため、幼稚園と保育所の両方の機能を併せ持った認定こども園制度が平成 18 年 10 月に施行された。内閣府では、認定こども園を「集団活動・異年齢交流に大切な子ども集団を保ち、すこやかな育ちを支援」と位置付けているが、実際には異年齢交流の頻度は少ないのが現状である。幼少期の異年齢交流は人格の形成に必要なことであるため、実態調査を行う必要がある。

本研究では、認定こども園の異年齢交流の頻度が少ないことに対し、現在運営している認定こども園における建築計画的特徴や取り組みについて明らかにすることを目的とする。

##### 1-2. 本研究の位置付け

朝倉らの研究<sup>1)</sup>では、園舎の配置と異年齢交流の頻度に関する考察がなされており、園舎の配置に関わらず交流の頻度が少ないことが示されている。異年齢交流に関する研究は他にもされているが、異年齢交流が行われる建築空間と関連付けた研究は少ない。異年齢交流の空間の実態を知るためには、園舎の配置だけでなく、実際に異年齢交流が行われている建築空間について詳細に調査する必要がある。本研究では、異年齢交流の空間と諸室・家具の配置・特徴の関係について分析を行うものとする。

##### 1-3. 研究対象

内閣府が提唱する認定こども園は 4 つの類型に分けられている (表 1)。本研究では、認定こども園の中でも幼保連携型を研究対象とする。

対象地域は、教育・保育ニーズの多様化や、今後認定こども園が増えることが予想される東京都とする。そのため、先行的に運営されている東京都の幼保連携型認定こども園 21 園のうち、アンケート調査と図面

提供が得られたものを分析対象とする。

表 1 認定こども園の類型

類型	機能
幼保連携型	認可幼稚園と認可保育所とが連携して、一体的な運営を行う事により、認定こども園としての機能を果たすタイプ
幼稚園型	認可幼稚園が保育に欠ける子どものための保育時間を確保するなど、保育的な機能を備えて認定こども園としての機能を果たすタイプ
保育所型	認可保育所が、保育に欠ける子ども以外の子どもの受け入れるなど、幼稚園的な機能を備えることで認定こども園としての機能を果たすタイプ
地方裁量型	幼稚園・保育園いずれの認可もない地域の教育保育施設が、認定こども園として必要な機能を果たすタイプ

山崎らの研究<sup>2)</sup>の表 1 引用

##### 1-4. 研究方法

本研究では、認定こども園の職員に対するヒアリング調査と現地調査を行う。ヒアリング調査では、収集した図面をもとに、諸室の使われ方、異年齢交流のある場所、工夫している点などについてヒアリングを行う。現地調査では、収集した図面をもとに家具の配置をトレースし、椅子や棚・ついたてなどの家具・建具の寸法計測を行う。この 2 つの調査から得られた結果をもとに、異年齢交流の空間と諸室の使われ方や異年齢交流の空間における家具・建具の配置・特徴を分析する。

#### 第 2 章 異年齢交流の空間の使われ方と配置計画

現地調査を行った A 子ども園を対象に異年齢交流が行われている諸室を、平面図を用いて示す (図 1)。異年齢交流のある諸室は、各諸室によって時間帯、年齢、遊ぶ内容が異なることがわかった。面積の大きい遊戯室は、3 歳以上の幼児の各諸室から近い位置に配置されている。延長保育や土曜日保育など人数が少な

い時間帯は、3歳未満の乳児の各諸室など比較的面積の小さい諸室を使用し幅広い年齢の交流が行われている。また、延長保育の時間帯に使用する諸室は、3歳未満の乳児の各諸室に近いことがわかった。その理由には、乳児が移動することの難しさなどがあげられる。これらのことから、1・2歳の諸室は、乳児だけが使う空間でなく、異年齢交流が出来るよう乳幼児が使える空間として、工夫する必要があるといえる。

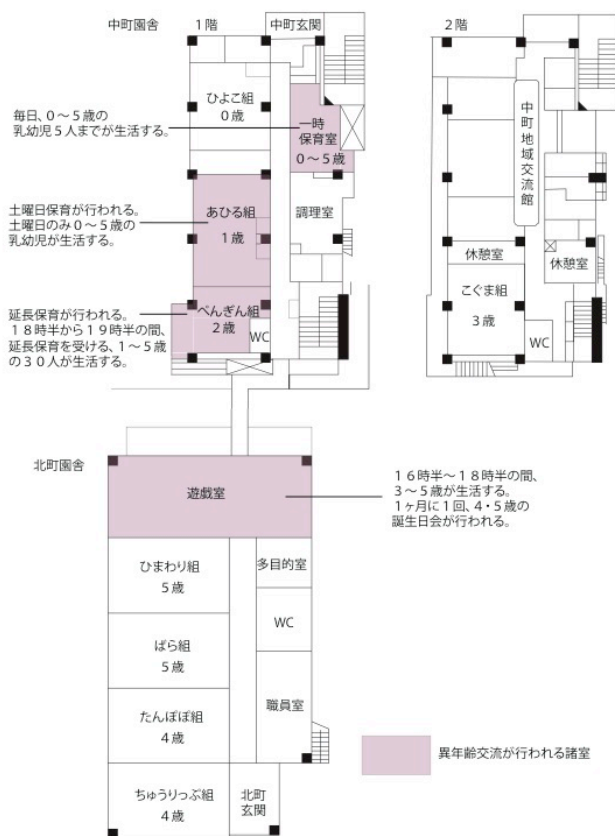


図 1. A 子ども園平面図

### 第 3 章 家具・建具の配置・特徴と異年齢交流の現状

#### 3-1. 家具・建具の配置・特徴

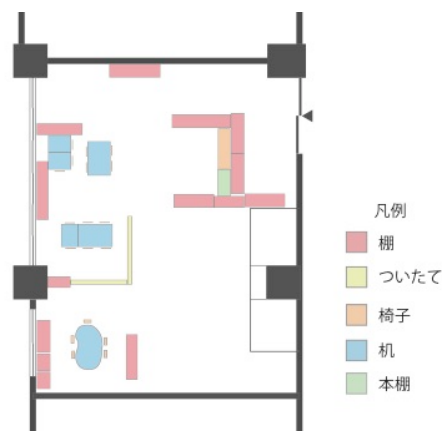
家具や建具で空間を仕切り、仕切られている空間で読書やままごとなど異なる遊びが行われている。仕切り方は、隙間を開けて家具や建具を配置したり、隙間のある建具を使用したりすることで、仕切りの向こう側の様子を感じることができる。仕切りとなる家具や建具の高さは 600~800mm 程度のものが多く、乳幼児にとっては仕切りが小さな囲いをつくり居場所となる。職員は、仕切りが低いことで全体を見渡せるようになっている。大きさの違う椅子や机があることで、

異年齢が同じ空間を共有しやすい環境になる。

図 2. A 子ども園あひる組の内観



図 3. A 子ども園あひる組の家具の配置図



#### 3-2. 異年齢交流によって起こる乳幼児の行動

異年齢が同じ空間で生活することで、年下の子どもは年上の子どもを見て学び、新しい遊びなどを真似し、取り入れている。また、年上の子どもは年下の子どもに譲り、教えるという行動が生まれる。

### 第 4 章 展望

今回の研究では、東京の幼保連携型認定こども園 21 園のうち現地調査を行った施設について記述した。今後は残りの施設を現地調査し、諸室や家具の使われ方の類型化を行うことで、より異年齢交流と空間の関連を詳細に調査する。また、異年齢ごとの乳幼児の動線を調査することで、異年齢交流が起こりやすい建築計画を提案することを目指したい。

#### 参考文献

- 1) 朝倉優哉 平田圭子「認定こども園における園舎の配置分類と園児の交流頻度に関する研究」日本建築学会大会(北海道) 2013 年 8 月
- 2) 山崎慎二 寺地洋之「認定こども園における園舎の平面構成についての基礎的考察」日本建築学会近畿支部研究報告書 2010 年 5 月